**研究発表要旨**

**Iris Murdoch 著：戯曲、「ジョアナ、ジョアナ」**

**佐久川　豊子**

　戯曲“Joanna, Joanna”　は１９６９年に書かれたが、出版は２５年後の１９９４年であった。喜劇であり、登場人物がユーモラスに描かれ、ストーリーは速い展開で興味を引く。登場人物達の滑稽さと崇高さが入り混じり、人間の真の価値とともに愚かさも描き出している。登場人物を中心に、この作品の意義と作者の哲学的信念について考察する。

　　第一に、キャシーは亡きジョアナとの戦いでヒラリーのジョアナへの愛を信仰によって許容するようにふるまう。それにより自分の苦しみの正当化を図る。それは恨みによる現実からの逃避で現実の直視を避けようとするキャシーの弱さが、彼女の精神を魔界へ引きずり込む。その中で彼女は常人の及ばない呪術的力を持っているかのようである。例えば、キャシーがロジャーを水晶玉に誘い、ロジャーは過去から現在までの苦しみの場面、即ちヒラリーとジョアナの密会等が映し出されるのを見る。

　次に、学長ロジャーである。ロジャーは知的であるが俗人である。「有能な経営手腕」、「高い社会的地位」、「若い妻」が彼を象徴している。ロジャーと妻がお互いをなじり会い、過去の不倫の相手を告白し合って和解に達する会話は滑稽である。彼は話し合いを望む学生に威圧的態度にでる。誠実に学生達と話し合うことができない。そのため抗議行動は過熱し学長退陣要求になる。ロジャーは妻ジルに苦しみや悩みは無意味で不愉快で得るものは何もない、また、我々は対面を重んじる人間なのだと語っているのも彼の世俗的人間性を表している。

　次にジョアナとは誰か。３人の男性から愛され、死後２０年経っても忘れられていないジョアナは魅力的な女性に違いない。彼女は死んだ後も周りの人々に影響力を持つ。最も強く影響をうけ、必死に対抗したキャシーが精神の変調を来たし飛行機の墜落事故に巻き込まれ急死する。ジョアナは人間の弱さをあぶりだす試験紙のような存在であると言える。

　　次に、ヒラリーである。学生たちの抗議運動に、ヒラリーが説得をする時、学生たちに研究者としての自分の無能さを包まず表明し自分の解雇は当然なのだという。「ぶち壊して何故悪い」と言う学生の言葉に対しヒラリーは言う。「何故悪いか教えてやろう。真実を蔑ろにしてはならない。なぜそうなったか、事の真相を究めることこそ重要だ。肝心なことは不正なことがなかったかどうかだ。碌に調べもしないで尤もらしいことを言うことは誰にでも出来る。よくよく注意して見なければ気が付かないこと、それを知ることから文明は進歩すると言って良い。……」（室谷訳）。作者の意図が読みとれる。ヒラリーは騒乱状態の学生達の中に飛び込みゲバ棒に当たり負傷する。

　ヒラリーは世間と組織の論理の中で弄ばれる落伍者で、大学教師としては無能に近いが彼は相手によって態度を変えない。ヒラリーには自分の思い通りになるという意味での権力者の持つ自由はないが別の自由がある。それは我々が考える近代の「個人の自由」とは異なる。マードックは「個人の自由」より大切なものがあると伝えている。

　マードックはヒラリーを通して、他者と自己の関わり合いから人格の変容が可能であることを示しており、その関係の上にマードックの考える愛があり、これを体現するのがヒラリーである。

　戯曲「ジョアナ、ジョアナ」は、精神の闇の世界を、社会的地位も権威もないヒラリーが、周囲に影響を与えながら精神の開拓者として歩んで行く姿を表現している。登場人物のコミカルなやりとりの中に作者マードックの哲学的信念、即ち、人間の精神が善なる意志によって形成され、支えられ進展して行くという未来への希望が表現されている。